

海外派遣研究助成事業による研究の成果

研究者氏名	石木 寛人
所属機関	国立がん研究センター中央病院
・参加した国際学会・会議名	ヨーロッパ緩和医療学会 (15 th World Congress of the European Association for Palliative Care)
渡航期間	自 平成 29 年 5 月 17 日 至 平成 29 年 5 月 22 日
・研究内容 ・国際学会・会議内容	皮膚自壊腫瘍による症状緩和のためのモーズ法の応用 -パイロットスタディー (示説)
<p>研究成果 (要約: 800 字)</p> <p>下記研究成果についてヨーロッパ緩和医療学会において示説発表を行った。(ポスター別添)</p> <p>【背景】モーズ法は皮膚癌の治療のために開発された処置法である。これはタンパク質凝集作用がある塩化亜鉛を含む軟膏 (モーズ軟膏) を皮膚癌病変に塗布し、病変を固定して治療する方法である。近年、日本では皮膚自壊腫瘍による症状を緩和するためにモーズ法が応用されるようになってきた。</p> <p>【目的】皮膚自壊腫瘍に伴う症状を有する癌患者に対して症状緩和目的でモーズ法を行う際の安全性と効果を探索的に調べる。</p> <p>【方法】単施設前向き観察研究。皮膚自壊腫瘍に伴う出血または浸出液を有する患者を対象とし、モーズ法を実施した際の効果と安全性を検討した。</p> <p>【結果】適格症例 7 例から文書同意を取得し、うち 5 例に 16 回モーズ法を実施した。モーズ法を実施しなかった 2 例はいずれも皮膚病変が深い潰瘍を伴っていた。モーズ法を実施した症例の原発巣は乳腺 3 例、頭頸部 1 例、血管肉腫 1 例だった。また対象とした症状は出血 3 例、浸出液 2 例だった。モーズ法実施中の有害事象は軽微で制御可能だった。モーズ法により出血のコントロールは良好だったが、浸出液のコントロールは不良だった。</p> <p>【結論】皮膚自壊腫瘍を有する患者に対してモーズ法は安全に実施された。モーズ法は出血の制御には有効だが、浸出液の制御は困難であると考えられた。この結果に基づき、我々はモーズ法の安全性を調べる 1 相試験 (UMIN000023418) を実施中である。</p>	